
呪われ王子と導きの娘

屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪われ王子と導きの娘

【Nコード】

N9137Z

【作者名】

麿

【あらすじ】

いつか遠くへ旅することが夢の虚弱な少女、深奈ミナは不思議な翼ある獅子に、ある王子を救って欲しいと言われて召喚された。そこで、深奈は矜持の高い王子、説教臭い従者のヴェイン、王家に居ついている聖獣モフォンと共に呪いを解く聖地を探す旅に出ることになる。

この小説は異世界召喚競作企画【テルミアストーリーズ+】参加予定作品です。

呪われた王子 (1) (前書き)

テルミアの存在を知ってから、どうしても我慢できずに書き始めてしまいました。冒頭部分を書き直しました。

呪われた王子 (1)

叶う夢と叶わない夢がある。

きっと、自分の願いは叶わないものだ。それでも、もしかしたら何とか出来るかもしれない、奇跡が起こって、この小さな夢を叶えてくれるかもしれないと心のどこかで願っていた。

叶わないと知りながら、諦めきれずにいる自分を馬鹿にしながら、それでも。

冬休みの夜、森^{ミナ}深奈は窓の外に雪が舞い落ちてくるのを見て、立ち上がった。それまでこたつに突っ込んでいた足を引きぬくと、一気に爪先が冷える。それでも深奈は足を止めずにガラスの引き戸を開けると、手を差し伸べた。

ふわり、と雪のかけらが舞い落ちて、一瞬針で刺したような痛みを残して溶け消える。

その様子に、深奈はほほ笑んだ。

「この水はどこから来たのかな」

呟いて、深奈はこたつのテーブルの上に広げた写真誌を見やる。それは、世界の綺麗な自然風景を集めた写真集で、深奈の愛読書のひとつだった。

と言うのも、深奈は小さい頃から体が弱く、年中熱を出して寝込むことが多かったので、あまり外出自体をしたことがない。それは

高校生になった今も変わらない。

アレルギーにも悩まされているし、消化器が丈夫じゃないのか、変なものを食べればお腹をこわす。そのせいで、今まで旅行らしい旅行はしたことがなかった。

学校の修学旅行すら、熱を出して小・中校とも行けなかったくらいだ。

そのため、深奈の夢はいつかこの身体を丈夫にして、写真に載っている場所に行くことだった。

「どこか遠くへ行ってみたいな」

手に次々と舞い落ちる雪片を見詰めながら、ぼつりと呟く。

その時だった。深奈の目をほんの一瞬閃光が焼き、思わず小さく悲鳴を上げて目を閉じる。心臓が早鐘を打つ音を聞きながら、深奈は目を開け、さらに口も開けた。なぜなら、目の前には光に包まれた大きなライオンがいたからだ。

「な、な、何」

不思議と怖い感覚はなかったが、それでもライオンが宙に浮いている姿に、思わず腰が抜ける。床に尻もちをついた深奈の頭に声が響いた。落ち着いた男性の渋い声。

『あなたにお願いがあつてやって来ました。』

私が守護する国では今、ひとりの少年とその家族が苦しんでいます。私の主が唯一消せなかった呪いのせいで、少年はいつか人を食う化け物に変わってしまうのです。

これを解くには、呪いを掛けた銀の竜が眠る地を探さなければなりません。そこは只人には見つけられない場所にあります。私の

主と同じこの世界の人間でなければ見つけれないのです。

今、貴女は遠くへ行きたいと願った、だから私は貴女の呼び声に応えた。この頼みを聞いて下さるのなら、私は貴女の最も欲するものを与えましょう」

にわかには信じられない話だった。それよりもまず、目の前で光の粒子を全身にまとい、白鳥のようなまばゆい純白の翼を生やしているオスのライオンが喋っているのだと理解するのに時間がかかった。

「なにこれ、夢でも見てるの？」

『残念ながら真実です。さあ、答えを』

ライオンは問い、ばさりと翼をはためかせる。深奈は、突然訪れた展開について行けずに、どう答えたものか悩む。

「あの、ようするに私が異世界に行って王子様を助けるの？」

『ええ、そうです』

「全部終わればこっちに戻ってこられるの？ 願いは何でもいいの？」

『戻れます。責任を持って戻します。願いごとは私に可能な範囲に限りますが』

深奈は、自分の部屋の本棚に目をやる。そこには異世界へ旅して世界を救った子どもたちの話があり、今の状況がまさにそれだと気づいた。

その上、翼のあるライオンは王子を救う手助けをすれば、願いを叶えてくれると言う。

もしかしたら、私の夢が叶う？

「私がそっちに行っている間、こっちでも時間は進んじやうの？
お父さんとお母さんに心配かけたくないし……学校は休めないし」

「それも大丈夫です。あなたを今お連れした場合、今より1分ほど
後のこの場所に戻して差し上げることが可能ですから」

「どのくらい危険なの？」

「あなたに危険が及んだ場合は、私が現れて守ると誓いましょう。
さあ、答えを、王子の呪いは今この時も進んでいるのです」

ライオンは唸り声を上げる。深奈は、もしかしたらこれはこたつ
でうたた寝した自分の見た夢かもしれないと考えた。体が丈夫にな
ることを願うあまり見た都合の良い夢。それなら、もう少しだけ見
ていたい。だから答えた。

「わかった、手助けに行く」

「願いは？」

「旅が出来る丈夫な体が欲しいの。滅多に病気なんかしない、どん
なものでも食べられる体になりたい。それから、色々な場所に自分
の足で行きたい！」

「分かりました、それでは」

ライオンが目を細めた時、深奈の頭を激しい頭痛が襲った。あま
りの痛みに気が遠くなる。両手で頭を抱えて、これは何と言おうと

したが、それより先に、深奈は気を失った。

顔に何か体がこすりつけてくる。ものすごく柔らかくて、くすぐりたい。その何かは、深奈が身じろぎすると、小さなはばたき音をたててどこかへ行ってしまった。一体何だったのだろう、それに人の声が聞こえるような気がする。体は重く、何かとても柔らかいものの上に寝ている事だけはわかった。

「……………」

「おお、目を覚まされましたか、どうです、どこか痛いところなどはありませんか？」

目を開けるなり訊ねられ、深奈はしばらく声を掛けてきた人物を眺めた。ようやく視界が晴れて、頭も働いてくると、深奈はがばつと上半身を起こし、口を開けて目を見開き、呟いた。

「嘘、本当に違う世界に来ちゃったの？」

「はい。ここはテルミアのリオニアという国です。あなた様は今日の午前中に街の広場に光と共に現れました。街の人々がもしや勇者様が再臨されたと大騒ぎし、ここへお連れしたという訳です」

丸い眼鏡を掛け、白衣を着た穏やかそうな中年の男性が、目を輝かせながら言う。

深奈は彼が今言った情景を思い描いて青ざめた。もっとこう、ひっそりと森のような場所に出て、ここはどこ？ 次に何をすればいいの？ と言ったような展開を想像していたのだが、どうやら派手派手しく現れてしまったらしい。

「貴女は勇者様なのでしょうか？ この国が今抱えている問題を解決しに現れたのでは？」

「ええっ！ ちっ違います。私は背中に羽を生やしたライオンに頼まれて、願いを叶える代わりに呪いに苦しんでいる少年を救う手助けをして欲しいって言われて」

「おお！ それはまさに守護聖獣リオノスではありませんか！ この何百年、彼の聖獣の姿を見たものはおらず、もうこの国は見放されたのだと言われてきましたが、やはり見捨ててはおられなかったですね！ 急いでこの事を陛下にお伝えしなくてはっ！ 失礼します」

「え、あの」

聞いてみたい事がたくさんあったのに、医者らしき男性はひとりで大騒ぎすると椅子から立ち上がって凄まじい速さで部屋を出て行ってしまった。

「陛下ああ〜大変ですぞお〜ついに〜導き手があ〜現れましたぞお
お〜っ」

廊下を叫びながら走って行く声が、ゆっくりと小さくなっていく。深奈は何が何やら分からないまま、とりあえずベッドを出る。服装はこたつにあたっていたままで、ダウンジャケットにジーパン姿と言つ色気も素っ気もないものだ。

空気は冷たい。こちらの世界も冬なのだろうか？ と深奈は考えた。

「お、王子様が……！」

深奈は、対面に腰かけた青年の言葉を思わず繰り返していた。その単語を聞いた途端に、頭に浮かんだのは良くある金髪碧眼、白馬に乗ったあんまり強くなさそうな人物のイメージだった。

今深奈がいるのは、城の中にある談話室という場所で、城に仕える者たちが休憩するのに使う場所なのだそう。座り心地の良いソファとテーブルが幾つも並び、夏場ならさぞ美しいであろう花壇が見える。今は雪が積もった針葉樹みたいな木が並んでいるだけだが、それでも綺麗だった。

「はい」

青年、ヴェインと名乗った彼は頷いた。

彼は王子の従者で、騎士なのだという。まだ年齢は二十三歳だと言っていたが、妙に威厳たっぷり、もっと年上に見える。重そうな金属の鎧を身につけ、剣を所持しているヴェインは騎士という印象にぴったりの人物だった。淡い茶色の髪は短く、鋭い目は鋼色をしており、体格はかなり大きい。

平均的日本人女性くらいの深奈は見上げなければ顔が見られない程だ。

「ですが、セリク王子は昨日、自分の力で何とかすると仰って、泣き落して衛兵を騙して逃走しましたので、その捜索が終わってからご協力頂ければと思います」

「呪われてる王子様が泣き落としで逃走……ですか」

深奈の考える「王子」とはズいぶんと違う気がする。まあ、王様の息子が王子なのだから、どんな人物であつても別におかしくはない。つい余計な夢を見た自分がちよつと恥ずかしい。

「はい、情けないことに。それで、導き手どのはご協力頂けるのですか？」

「あ、はい！ 何だか良くわかりませんが、健康と引き換えに引き受けちゃつたので頑張ります」

実は先ほどからヴェインによる細かいことの説明を受けているのだが、あまりにそれまでの現実とかけ離れていて実感が全くわからない。けれど、体が軽いことは本当だし、言ったことはきちんとやりたいという単純な思いから深奈は言った。

何より、この世界を旅出来るのだと考えただけでわくわくするのだ。

しかも、ヴェインの話によれば騎士たちの護衛付き。お金はこの国が出してくれるというではないか。こんなに嬉しいことはない。その上、時間は無制限、上手い話には裏があると言うが、今の深奈にはそんな考えは全く浮かばなかった。

「そうですか、良かった。それでは、私は王子を迎えに行つて参りますので」

「え？ 居場所わかつてるんですか？」

「はい。部下に跡をつけさせましたので、今はここから徒歩で一日行った宿場町に潜んでいるつもりです」

まあ、そうだろうなと深奈は思った。こんな凄そうな騎士を出し抜けるとは到底思えない。その時、深奈はふと思いついた。ただの好奇心ではあったが、それでも試してみる価値はある。

「あの、私も一緒について行っていいですか？」

そう言うと、ヴェインは驚いたように目を見開いた。

(3)

吐き出す息が白く凝る冬の正午。

大勢の旅人でにぎわう宿場町の通りを、深奈とヴェインは視線をあちこちにさまよわせながら歩いていた。初めて馬に乗ってきたが、ヴェインがきちんと支えてくれたのでそれほど怖くはなかった。

「ここにいるのは確かなんですよね？」

深奈は改めて訊ねた。ヴェインは頷いてから答える。

「はい。追いかけた部下の話によれば、この町で一泊したものと思われます。この町に入ってから出てきていないことは確かだのとですから」

「じゃあ、出て行っちゃう前に探さなきゃなりませんね。ええと、銀髪に銀の目でしたっけ？」

今朝、ヴェインに説明を受けた時に聞いた内容を思い出しながら深奈は言った。

馬に乗りながら、その話を脳内で懸命に整理してみたのだが、まだ半分もわかっていない。だが、とにかくこのリオニアの第二王子が人を食う化け物になってしまうという呪いに苦しんでおり、そのせいで元々は黒かった髪はくすんだ銀色に変じ、瞳も同じ色になってしまったという部分はわかっていた。

「はい、後嗣たる象徴である黒髪黒眼を失ってしまったので」

彼は深奈の問いに、沈痛な表情を浮かべた。深奈は慌てて言った。

「だ、大丈夫ですよ、きつと元に戻りますからっ」

「ありがとうございます。貴女様が来て下さって本当に良かった」

深奈は期待をこめた眼差しにさらされ、言葉に詰まった。期待されていることはわかるし、そのためにこちらの世界に連れてこられたのだから、役割は果たしたい。と言っても、具体的にどうすれば良いのかはまだあまりわかっていない。ただ、頑張るつもりだけはあった。

深奈は困惑ぎみにヴェインから目を反らす。すると、深奈の目に何かの人だかりが飛び込んできた。どうやら何かで揉めているらしい。

「何でしょう?」

「もしや……! 行ってみましょう!」

「え、え?」

突然ヴェインは何か気づいたように鋭く言うと、深奈の手首をつかんで人だかりに突入した。いきなりおしくらまんじゅう状態になり、息が詰まった深奈は「うぐふ」と謎のうめき声を上げる。しばらく耐えていると、人だかりの先頭に出た。

ようやく呼吸出来るようになり、深奈は大きく息をする。途端、人のどなり声が聞こえてきた。驚いて目を向けると、そこにいた。

「ああ何度でも言ってやるさ、幾らなんでもお前の宿は値段設定がおかしすぎる。」

あんな固い貧相なベッドと風の吹き込む寒い部屋のくせして、暖炉もない、しかも食事は少ないうえに不味い、だというのに一泊銀貨三枚だと？ 銅貨三枚の間違いだろう！」

腰に手を当て、偉そうな調子で店主に向かって説教を垂れる少年。その髪は灰色に近い銀色で、時々あらぬ方向に跳びはねているが、さっぱりと短めに整えられている。顔立ちはすっきりと整っており、偉そうにしても嫌みさがなかった。

「ここは高級宿じゃないんですよ、そのくらい貰わないと運営していけないんです。大人しく代金を払って下さい。それ以上ここでわめくようなら営業妨害として警備兵を呼びますよ」

「呼べばいいさ、そいつらにもここが悪徳宿だと教えてやる！ 俺は絶対に銅貨三枚しか払わない、この宿にはそれ以上の価値はない！」

「……見つけましたよ！ セリク様っ！」

ヴェインが少年に呼びかけた。少年 セリクの目がこちらに向く。ものすごきぎょつとした様子で、悔しげにこちらを睨みつける。

「ちっ、もう見つかったか」

「戻りましょう、貴方にご自分の立場と言うものを思い出させて差し上げます」

ヴェインはセリクに歩み寄ると、上から鋭い目で睨む。深奈は怖いと思いつつ、傍らで不機嫌そうに顔をしかめている少年を眺めた。何と言うか、自分の中にあつた「王子」のイメージが崩れ去る。す

ると、セリクの方も深奈に気づいた。

「そいつは誰だ？ 初めて見る顔だが」

「異界より呼び出された『導きの娘』です。あなた様が城を後にしてすぐにごちらへ現れました。すでにご協力頂けることになっております。ですから、後は我々と彼女にお任せ下さい」

ヴェインが告げると、セリクは「やなことだ」と答えてそっぽを向いてしまった。そこへ、困った様子の店主が割り込んでくる。

「あなたは彼の知り合いですか？ だったら説得しちゃくれませんかね、こっちもいつまでもこうしていられないんですよ」

「ああ、すみません。銀貨三枚でしたら私が払います……これでいいですね」

「ありがとうございました」

ヴェインは懐から金入れを出すと、あっさり支払ってしまった。店主は手のひらに載せられた金の数を確認すると、ヴェインに頭を下げて店の中へ戻って行く。すると、セリクが怒鳴った。

「あっ！ 待てよこの悪徳店主っ！」

「いい加減にして下さい。さあ、行きますよ……どうしても行くと言っのなら、ちゃんと周囲を説得してからにして下さい。こういう事は困ります」

ヴェインはたしなめるように告げると、手を叩く。同時に、人垣

から彼と似た体躯の若者たちが三人現れて、セリクを取り囲んだ。どうやら彼の部下らしい。

「くそつ、覚えてろよヴェイン。俺は絶対に自分の力でこの呪いを解いてやる」

「ですので、周囲を納得させてからにして下さい。そうすれば文句は言いませんよ。さあ、ミナ様も戻りましょう」

「はい」

深奈は頷いて、歩きだしたヴェインとその部下に囲まれたセリクの後ろに続いた。それから、この王子様はどんな人なんだろう、と心の中でこっそりと思っただった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9137z/>

呪われ王子と導きの娘

2011年12月29日16時35分発行